

2016.11 no.75



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



井上勝江 「美しい瞳」 '16 木版画 42×101cm



魅惑 2016、36 × 60cm



愛の告白 2015、80 × 50cm

井上勝江

新潟県生まれ

1976 日本版画院同人、aacia 賞（建築美術工業協会）、
日本玩具シリーズ（米田工房刊）

1982 日本版画院理事（1982-99）

2007 第57回版画院 棟方志功賞

2015 府中美術館 版画がつなぐ心とココロ 棟方末華 井上勝江展

現在 日本版画院同人、同院評議員、日本美術家連盟会員
よみうり文化センター町田講師、日本建築美術工芸協会会員

ふるさと新潟の花はチューリップです。しかし今では花は富山県、球根が新潟だということを最近知りました。幼い頃から花となればチューリップでした。何時も制作体勢に入ると、まずチューリップを画きだしてしまいます。筆がすすみます。

「花の表現者になるように。」と棟方志功先生のお言葉を守りつづけ五十一年の年が過ぎてしまいました。黒と白で美しい花を求めつづけています。花は私にとって生涯のテーマであり友であります。

— 2016.11 no.75 —

CONTENTS

■ 2016aaca 景観シンポジウム

景観シンポジウムの開催	川瀬 俊二	3
としまエコミューゼタウン 講演報告	黒木 正郎	4
「としまエコミューゼタウン・豊島区新庁舎の計画とデザイン」に参加して	北 典夫	5

■ 第57回aaca 講演会

建築家が見た、被援助国の生活様式と建築様式	平岡 省吉	6
-----------------------	-------	---

■ 街なかミュゼ活動

第3回 街に飛び出す作品展	安河内敦子	8
受託事業作品設置報告	米林 雄一	10

■ 時代の華一輪

芸術的な焼物文化を歴史に刻む仕事	常松 欽治	12
「空間」としての彫刻	田中ショウ	13

■ 寄稿

日本工芸の復興を目指して	林田 英樹	14
トリッキーなヴィジュアルとオブジェで世界に発信!	U.G. サトー	15

■ 会員活動レポート

第80回新制作展を通して	二井 進	16
タイルモザイク展 浮遊する陶片 2016	松本 治子	17

■ 調査研究委員会だより

「エコロジーとアート」発行に際して	南 三一郎	18
-------------------	-------	----

アピアランス、訃報		19
-----------	--	----

広報委員会だより・事務局だより・他		20
-------------------	--	----

景観シンポジウムの開催

建築家

日本建築美術工芸協会専務理事
景観シンポジウム委員会委員長

川瀬 俊二

日本建築美術工芸協会では、年初と夏の二回、景観シンポジウムを開催しています。都市景観に大きな影響を与えるような話題性のあるプロジェクトや再開発に焦点を当て、建築、都市、アートがどのような役割を果たしたか、その狙いや将来の発展などについて、事業主、設計者、アーティストなどプロジェクトの参加者に登壇頂いています。

今年は、1月26日にiTSCOM STUDIO & HALL 二子玉川ライズで、一近郊ターミナルの景観づくり「二子玉川ライズ」と題して景観シンポジウムを開催しました。プロジェクトの現地でシンポジウムを開催するのは初めてでしたが、ライズが話題のプロジェクトであり、大勢の方々に参加いただき、交流会も同ホールで大変盛り上がりしました。ライズが30年に及ぶ長い歴史の中で開発され誕生したのを私たちは知りましたが、シンポジウムの前後に街を散策した人々も多く、ライズが如何に魅力的な街に発展したか実感した次第です。登壇の渋谷様、宮原様、佐藤様、そしてファシリテータの今村様に感謝する次第です。

さて8月22日には、会場を駿河台の日大理工学部一号館に会場を移し、「としまエコミューゼタウン・豊島区新庁舎」の計画とデザインを敢行しました。外観や壁面緑化、庁舎と住宅の超高層、税金を一切使わない開発手法など話題性の高いシンポジウムに、1月同様、大勢の方々に参加頂きました。

しかし、開催前夜から真夏の台風が到来、当日は、関東直撃というニュースが飛び込んで来たからです。まんじりともせず、当日の朝を迎え、午前中は、協会の事務局長や登壇者の先生方、協会のシンポジウム実行委員会の面々と連絡を取り合い、シンポジウム開催の是非を討議しました。幸い、台風が正午頃に弱まり、午後には雨も少し弱まりました。駿河台が御茶ノ水駅を中心にJRや地下鉄など交通の利便性が高いこともあり、5名の登壇者全員が会場に来て頂ける事が確認出来ました。

そして、シンポジウム開催の30分前頃前から、参加者が集まり始め、結果的に200名近い方々にお見え頂き、1号館121

「としまエコミューゼタウン・豊島区新庁舎の計画とデザイン」

- 日時 2016年8月22日(月)
- 会場 日本大学駿河台校舎1号館121号室

[シンポジウム]

●第一部 講演

- 講師 上杉彰雄氏(豊島区庁舎運営課長)
- 講師 黒木正郎氏(株式会社日本設計執行役員フェロー)
- 講師 平賀達也氏(株式会社ランドスケープ・プラス代表取締役)

●第二部 パネル・ディスカッション

- ファシリテーター
今村創平氏(千葉大学建築都市環境学科准教授)
- パネリスト 上村彰雄氏
- パネリスト 黒木正郎氏
- パネリスト 齊川拓未氏(株式会社隈研吾建築都市設計事務所設計室長兼齊川拓未建築設計事務所)

号教室は、お陰様で満席となり、無事、シンポジウムを実施することが出来ました。各講師の先生方の講演内容も綿密で素晴らしく、アフターの交流会でも参加者の皆様から中味の濃い印象的なシンポジウムであったとお褒めの言葉を頂きました。ご登壇の上村様、黒木様、平賀様、齋川様、今村様、そして悪天候にもめげず、お集まり頂いた参加者の方々に心より感謝申し上げます。

開催者の私たちにとっても台風直下の忘れられないシンポジウムになりました。

今後も、日本建築美術工芸協会では、このような話題性のある都市を魅力的にしていくプロジェクトを取り上げ、景観シンポジウムを開催していく予定です。

会員のみならず、ご友人の皆様、お誘い合わせの上、是非、ご参加下さいますようお願い申し上げます。



2016aaca 景観シンポジウムの開催

としまエコミューゼタウン 講演報告

株式会社日本設計執行役員フェロー
日本建築美術工芸協会法人会員 **黒木 正郎**

去る8月22日、日本大学駿河台校舎にて日本建築美術工芸協会（aaca 岡本賢会長）2016年景観シンポジウム「池袋副都心の景観をリードする「としまエコミューゼタウン・豊島区新庁舎の計画とデザイン」が開かれました。としまエコミューゼタウンは区有地と民間地権者の所有地を合わせた第一種市街地再開発事業として施行され、区の新庁舎の上部に民間の区分所有住宅が載った形式とこの事業の結果としての資産価値の大幅な上昇が話題になって、一般マスコミ等にも盛んに取り上げられた計画です。シンポジウムには豊島区の職員として当初から携わってきた上村彰雄庁舎運営課長、屋上庭園の設計者であるランドスケーププラスの平賀達也代表、外観デザイン監修者である隈研吾建築都市設計事務所の斉川拓未室長、日本設計からは当初計画時からの全体設計者である黒木正郎がパネラーとして登壇しました。司会は千葉工業大学の今村創平准教授が担当しました。

シンポジウムでは、上村課長から老朽化した区庁舎の建て替えに関してこの場所での再開発のほかには方法は考えられなかったこと、それに対していかに根気よく区民などに本事業の意味と価値を説明していったかが語られました。黒木からは計画に当たって庁舎と住宅を上下に合築した一棟案の合理性にたいして、それを実現するために超えなければならなかったハードルについて紹介しました。また、平賀代表からは庁舎の屋上部分を利用した庭園は、単なる屋上緑化に留まらない地域の環境再生と次世代を担う子供たちへのちいぐ環境教育の場として作られた、ということが活動の様子まで交えて紹介されました。最後に斉川室長から外観デザインにあたっては、コンセプトとして「樹木のような建築」でありたいと考えた理由として大型の建築物が地域環境と共棲するすがたとして「大きな樹木」のありかたをモチーフにしたことが語られました。

各登壇者に対して司会の今村氏からは具体的に街がどう変わったのか、今回のプロジェクトを成功に導いたポイントは何だったか、また景観としてどういう考え方でこの建物を評価したらよいか、などの質問がありました。それに対して上村課長からは、成功事例があると区民たちの見目が変わること、区が率先して庁舎の開放、区有地や区施設の民間との協働事業を進めた結果、今後も新規のプロジェクトが続いており明らかに地域に活気が満ち始めていることが挙げられました。黒木からはプロジェクトを成功に導いたのは地域住民と行政とが実に綿密な意思疎通を重ね、結果として地域の関係者の総意を得るための「合意形成のルール」が形成されたことが大きいと説明しました。景観のあり方としてのこの建物の意味については平賀代表から都市に育つ子供たちの未来の作り方として「人間しか資源のない国」「きわめて豊かな自然のある国」という両面を持つわが国の特質を生かしてひとつの形を示しえたという意見が述べられました。

シンポジウム後の懇談会では登壇者らを囲んで質疑応答や意見交換がなされましたが、足掛け12年をかけたプロジェクトへのねぎらいの言葉のみならず、建築界以外の行政・マスコミからの注目を集めるプロジェクトとなったことへの賞賛が多かったことが印象に残ります。加えて、区と住民にとって様々な形で利益を最大化できた要因として、近年の再開発プロジェクトは早期から民間事業者任せりにしてしまうものが多い中、本件は事業推進に関して最終段階までいわゆるデベロッパーの力に頼らずに、自分たちにとって必要なものを自分たちで判断して決める、という姿勢を貫いたことが功を奏したことが登壇者の総意として語られていました。台風の中200人以上の聴衆を集めた熱気あるシンポジウムでした。



屋上庭園

「としまエコミューゼタウン・豊島区新庁舎の計画とデザイン」に参加して

鹿島建設株式会社
執行役員プリンシパルアーキテクト 北 典夫
日本建築美術工芸協会法人会員

全国初の「本庁舎・分譲マンションの上下合築」として完成にいたった「としまエコミューゼタウン・豊島区新庁舎」は、全国の自治体関係者の注目を浴び、見学者がひきもきらず来訪しているという。今回のシンポジウムはこのプロジェクトの計画とデザインを巡ってであった。

第1部では、この都市再生のリーディングプロジェクトを牽引した中心メンバー3人による講演、第2部ではそこに建築設計担当者を加えた4人によるパネルディスカッションが行われた。全体を通して伝わってきたのは、人口減少による活力低下の危機（23区内唯一の消滅可能性都市！）にあって持続発展都市をめざそうとする豊島区の強い意思だったように思う。

特にプロジェクトの全プロセスに携わった上村彰雄豊島区庁舎運営課長の講演「新庁舎整備の奇跡」は、官民連携で税金を使わずに実現に導いた仕組みを解説するもので、興味深く、強い印象を残した。

「としまエコミューゼタウン・豊島区新庁舎」は、シンボリックな建築に違いない。基壇の上にそそり立つ189mのタワーは威容を誇る。しかし、そのシンボリズムは私たちのよく知るものとは大きく違う。この建築を真にユニークにしているのは、庁舎を内包する基壇部の都市文化的文脈における公共空間の新たなありようだからだ。

いわゆる「庁舎らしさ」を微塵も主張することなく、雑司ヶ谷霊園から本立寺・南池袋公園に至る緑の連鎖の地形的中継点を作り出している。また自然の要素を取り込んで息をするかのような建築の襞＝「エコヴェール」で基壇部を包み込んでいる。そうすることで、ともすると孤立しがちな庁舎を広域的な景観の文脈の中に置き、『それ自体が自律的に存在するのではなく、区民の福利と地域の将来発展に奉仕する』ための存在とすることに成功している。そこには、計画・設計者側の自然と歴史を読み解く立体的な視点と科学的なロジックに立脚したデザイン戦略、「ランドスケープ・アーバニズム」とも言うべき思想が見て取れる。

建築設計を担当した日本設計の黒木正郎氏は、計画地域の住民との合意形成をポイントに挙げ、ランドスケープを担当し、今回のシンポジウムのオピニオンリーダーでもあった平賀達也氏は、都市の自然と人々の日常の所作について熱く語っていた。皆がこぞって生活者の視線でものごとをとらえ、計画し、その延長上に、いかにも池袋らしい親しみやすく多様に富んだ都市景観が作り上げられたことが知られる。



エコヴェール

私は現在、豊島区が取り組む「国際アートカルチャー都市構想」において空間的な枢軸と位置付けられた南北区道「アーバンコリドー」の北部エリアで、業務・文化・商業が複合した建築が織りなす新たな都市拠点の創出に参与している。これは豊島区が掲げる「誰もが主役となれる劇場都市」構想を牽引する官民連携の公有地活用プロジェクトで、「としまエコミューゼタウン・豊島区新庁舎」と対をなし、池袋の人の流れと情報発信力を変革し、都市の魅力を飛躍的に向上させ、新たな都市のシンボリズムを作り出そうという試みである。

かつて池袋には、大衆文化を支え、育てる演劇の拠点があり、多能異才の芸術家が日々集まっては議論を交わす場があった。また、固有の情報の発信地、生き生きとした文化が絶えず胚胎されるまちであった。その今も息づく底知れぬ活力を受け継ぐべく、最先端のアート・カルチャーから伝統芸能までの多彩なジャンルに対応する8つの劇場が、公園や道路と一体となって、目くるめくような劇場空間を形成する。まち全体が舞台と化し、日常と位相を異にする圧倒的な「ハレの場」が演出され、人々は時に観客となって楽しみ、時に主役となって興じる。2020年、世界的なスポーツの祭典の年に、世界の人々が集う池袋のまちびらきが楽しみである。そのとき、新たな公共サービスの真価が問われるだろう。

今回のシンポジウムでやや残念であったのは、テーマが建築に寄りすぎたきらいがあったことだ。次回以降、より広範な関係者の参加を、また美術関係者を含む幅広い分野の人々の視点を交えた、aacaならではの景観シンポジウムを期待したい。最後に、初動期に多くのリスクが予想されたであろう「本庁舎・分譲マンションの上下合築」というグランドデザインを決断した関係者の先見の明に敬意を表したい。

第57回 aaca 講演会

建築家が見た、被援助国の生活様式と建築様式

株式会社大建設代表取締役社長
日本建築美術工芸協会法人会員

平岡 省吉



常々、建築・都市のありようを造るのは人々の生活そのものであると考えています。大都市には大都市の、田舎町には田舎町の、必ずそのベースとなる人々の生活と歴史がある訳です。建築家はそこに少しだけ方向性と刺激を与えるに過ぎません。そんな観点で捉えると、私の訪れた貧しい国々の建築・都市のありようは、良きも悪しきもみごとにその人々の生活を映していたと言えます。ここでは西アフリカのギニアとセネガル、中央アジアのブータン、中米のニカラグアについてお話させていただきます。

今でこそアフリカはその資源故に世界に注目されていますが、私がギニアとセネガルに滞在したのは1992～1993年のことで、アフリカへの支援でも有名な俳優のブラッド・ピットが「世界はアフリカを檻の中に閉じ込め、外から援助と称して涙金を投げ入れられている」と表現した、まさにそのままでの世界で、隔絶された空間は想像を絶する貧困が充満していました。私は国際協力事業団（現国際協力機構、以下JICA）の無償資金協力案件で、ギニアとセネガルにそれぞれ数十校の学校を作るプロジェクトのコンサルタントとして派遣されたのですが、最初に足を踏み入れたギニア（名目GDP \$542/人、「世界経済のネタ帳」より2015年の値、以下同様、ちなみに日本は名目GDP \$32,486/人）の首都コナクリでは、貧困にあえぐ人々が阿修羅のごとく食欲にうごめき、私はその地獄絵図にショックを受けながら、この人たちには、経済的にも精神的にも救われて豊かな生活を営むような未来があり得るのだろうか、暗澹たる気持ちになったものです。ギニアは、独裁的社会主義体制から自由主義体制になったばかりで、まともな産業もインフラもない中、コナクリにあてもなく人々が集まっていたのですが、国を導くべき上級役人も私利私欲を隠そうとせず、小役人は賄賂

潰けになり、カットゲ警官、チップ目当ての子供たち、これらの人々が雑然としたひと固まりの群衆を形成していました。そして、それはそのままコナクリの都市像としても表れていました。いくつかの幹線道路はあるものの、その廻りの商店や住宅は、土地を奪い合いで確保したかのような混乱の極みで路地が入り組み、家庭排水は路地に垂れ流し、ゴミも路肩に山積み、およそ街としての体裁を保っておらず、街全体が「スラム」を絵に描いたような状態でした。阿修羅のような群衆とごみ溜めのような街は、その意味ではみごとに相関を持っていたと言えます。

一方セネガル（名目GDP \$913/人）は、アフリカでは比較的裕福な国で、首都ダカールには10階建て程の高層ビルが多く存在し、道路も整備されていて、一見コナクリのような悲惨な状況はないように見えます。しかし、そんなダカールでも人々の貧しさは相当なもので、街には障害を持った物乞い、執拗なストリートベンダーがあふれ、まともな仕事がないのか随所に何もしていない住民がたむろしているし、「アフリカの貧困」が充満していました。整備された表通りの街並みは、こうした貧しい人々の生活と乖離した感じで、むしろ、裏通りの市場などの雑然とした姿が本来の街のありようなのだろうと私なりに納得したものです。少し背伸びをしたような表通りですが、仮にこれが発展途上のひとつのステップであるとすれば、そこから人々の生活は改善に向かうはずで、それこそが **ギニアの村** 建築計画・都市計画の妙だと思いました。



ギニアの村

貧しく食欲な人々の話ばかりでしたが、ギニアの田舎になると、それ以上に貧しいにもかかわらず話は少々異なってきます。ギニアの田舎の村々は、おそらく世界でも最も貧しい地域のひとつでしょう。電気も水道もなく、家は土壁に藁を葺いただけの極めて原始的なものです。しかし人々はヤギを放し飼いにし、森のマンゴーの実を分け合い、家の前に種を蒔けばほっておいてもできる作物に感謝しながら、慎ましく幸せに生きています。そんな人々は、首都コナクリ



の食欲な連中とは全く別の人種です。我々が訪れると、チップを要求するのではなく、籠一杯のオレンジをふるまってくれました。彼らとは比べようもなく豊かであるという自負を持っていた私たち日本人も、彼らの生活を見ながら、つい「私たちと彼らとどちらが幸せか分からないよね」とつぶやいたものです。最低限



ブータンの農家

の慎ましやかな生活と、最低限の村落と、その中にある幸せ。村々を訪れるたびに私は、人間の原点に触れたような気がしました。これは先進国では遥か昔に失われてしまった価値観です。

後述のニカラグアへの乗り継ぎで、私は何度もヒューストン郊外に宿を取りましたが、ホテルの前を歩く人影はなく、ただ、自動車が無機質な音を立てて疾走している。そんなところに住んでいる人々の生活を無味乾燥だと感じた私は間違っていないと思います。人間の原点であるギニアの村々とSF映画のようなヒューストン、人間の生活と都市の関係の両極端がそこにあります。

さて、アフリカの国々と比べるとはるかに豊かなブータン（名目 GDP \$2,843/人）ですが、それでも最貧国の範疇を出ません。ブータンへは、私が世界建築家会議（2011年東京開催）で当時のティンレイ首相の接遇役を仰せつかったことをきっかけに、後日訪問することができました。この国は、かつて近代化の波が押し寄せる中で「変わらないこと」を選びました。物質主義的な側面での「豊かさ」に代わる価値観として国民総幸福量（GNH）を提唱し「世界一幸せな国」として先進国の注目を集めています。こうした価値観は様々な政策にも表れており、例えば勤務先や学校では民族衣装を着用することが義務付けられていますが、これは伝統を重んずるためであると同時に、国内の繊維産業を守るためでもあります。建築の話をするすと、階数に関して一般的には3階建まで、都市部で5階建までという規制があり、ブータンの牧歌的な景観に寄与しています。日本など先進国のように開発競争に走らない街づくり、独特の伝統的なデザインと相俟って、人々の慎ましい生活にふさわしい景観が生まれています。人種が似ていることもあり、日本人にとっては



何か郷愁を覚えさせる国です。ブータンは、慎ましい生活の中に幸せを見つけるという意味では、ギニアの村々と似ていると感じました。そ

んなブータンですが、近年政府のGNH重視に疑問を投げかける人も現れはじめ、都市部では雇用問題などから薬物乱用、アルコール依存なども増えているとか。「西洋文明」がブータンを侵食しているとしたら、なんとも寂しい話です。



ニカラグアのコロニアル建築

最後にニカラグアの話をする。ニカラグア（名目 GDP \$1,949/人）も JICA の無償資金協力で学校を数十校作るプロジェクトで滞在しました。貧しい国ながら、その原因はアフリカのように世界に「放置」されたからではなく、むしろ先進国に「干渉」されてずたずたにされたことによります。今は比較的安定していますが、ニカラグアの街は、長い内戦を繰り返したその凄惨な歴史を刻んでいます。スペインの植民地であったことから、コロニアル様式の美しい街並みも残っていますが、スラムはギニアのコナクリと同様、無秩序に拡大してしまっています。貧しさ故なのか、また凄惨な内戦の記憶故なのか、多くの人々が麻薬や犯罪に走り、通りを歩くこともままならない危険な街を形成してしまっています。我々が建設現場を調査している時も、通訳として雇ったアルバイトの現地人学生が私の目の前で暴漢に現金を奪われるという事件がありました。そんなことが日常茶飯事に起こっています。国は教育に力を入れています、経済力もさることながら、教育を通じて人々のモラルが向上しない限り、凄惨な街はその表情を変えないでしょう。

貧しい故に人間の醜さが前面に出ている社会では、その街も醜くなっていくこと、逆に貧しくとも心が豊かであれば、美しい集落・街が保てること、私は多くの国を訪れてそんなことを学びました。前者のような社会がより豊かになって行くためには、経済的な発展と併せて人々の考え方が変わっていかねばなりません。そのためには教育が極めて重要です。冒頭で、ギニアの現状に絶望感を覚えた話をいたしました、私の関わったプロジェクトはまさに子供たち



セネガルの子供たち

の教育のための施設を作ることでしたから、アフリカ、中米などの最貧国の状況が改善するための一助となったと考えれば、本当にやりがいのある仕事だったと言えます。いろいろなことがありましたが、今でも、アフリカの学校の引き渡し式で大歓声を上げて喜んでいたり子供たちや、涙ながらに感謝してくれていた村人たちのことを、でっかい夕日と共に思い出します。

街なかミュゼ活動

第3回 街に飛び出す作品展

「街なかミュゼ活動」は、建築の内部及び外部空間や街並みに芸術・工芸作品を設置し、環境美化、人間性豊かな空間創造を積極的に展開していこうとする活動です。第3回 街に飛び出す作品展では、文京区本郷・世田谷区太子堂・和光市丸山台に、スタートCAM(株)が建設した建物に対して26作品、24名の応募申込がありました。平成27年10月24日より11月1日まで建築会館ギャラリーにて第3回 街に飛び出す作品展として展示し、作家の皆様のプレゼンテーションを交えて、建物のオーナー、スタートCAM(株)、aaca 選考委員の三者で検討選考しました。そしてそれぞれの美的環境の創造と、各建物の住環境に調和し、また街並みに新鮮な言葉を投げかける作品9点(9名)が選定され設置されました。

① プロシード本郷 (文京区本郷 2-128-2)



<エントランス> 「環」横山 徹

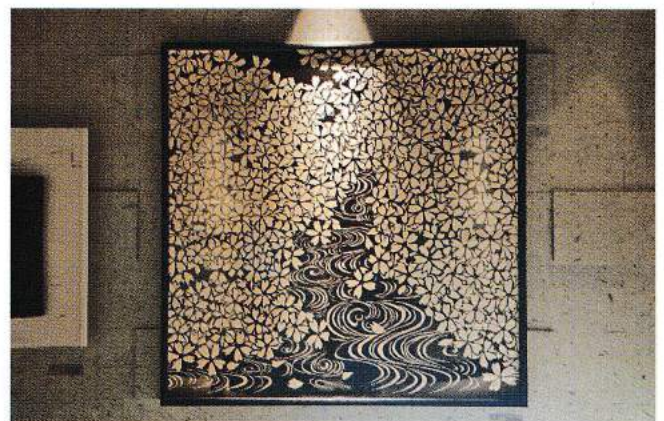


<坪庭> 「シェル NO.5」安河内敦子

ガラス造形作家
日本建築美術工芸協会理事
展覧会委員会実行委員長
安河内敦子



<エントランスホール> 「兆」山崎輝子



<エントランスホール> 「春を待つ」井上勝江



<エントランスホール> 「緋」小泉伸子

② & associe (アンド アソシエ) (世田谷区太子堂 2-242-1 他)



<エントランス> 「雨あがる」 鈴木法明

③カルム丸山台 (和光市丸山台 2-6-3)



<エントランス> 「想いの詩」 吉野ヨン子



<正面外壁> 「TOMORROW-時」 重田由美子



<内部> 「イブの涙」 井上勝枝

● 展覧会委員会からのお詫び



「TRUN OF THE CENTURY」 池田嘉文

前号掲載の池田嘉文氏の作品名が違っていました。訂正いたします。

① シャルマンクレスト
(江戸川区一之江 7-75-4)

● 次回展覧会のお知らせ

「aaca ボックスアート展 (仮称)」

■ 平成 29 年 4 月 11 日～ 18 日

■ 建築会館ギャラリー

会員・一般からの応募を受け付け致します。
詳細は後日発表致します。

受託事業作品設置報告

彫刻家
日本建築美術工芸協会理事
展覧会委員会委員
米林 雄一

aaca がこれまで取り組んできた「街なかミューゼ活動」の一つの実績として報告できる事は、オーナー様、スタートCAM（株）そして私達の会と会員にとりましても、とても喜ばしい事と思います。この場を借りて関係の皆様へ感謝申し上げます。

近年私達の住環境に、アートの力を生かした場や、その試みが行われています。自然との融合や、人間の創造性が生かされた、クリエイティブ・ライフ空間が求められてきたという事でしょう。このたびスタートCAM株が開発を担当した共同住宅に aaca 会員作家の作品を展示することになり、設置が叶いました。

その3件を紹介します。



<外部井戸回り> 「大地からの蘇生」
作家：横山 徹（石彫）
サイズ：1.95 × 0.8 × 1.7m 1.5t. 小松石

制作テーマに自然との対話をあげ、石の表情を生かしながら直感的な構成から、コミュニティのシンボルとなるよう空間演出している。

<B棟エントランス壁> 「Blade」
作家：ツイヒジ カズマサ
サイズ：803 × 803 × 120mm 木 着色塗装

人の視覚は人の動きにつれて変化し、何かを感じさせる。作品はその人が好きな位置で立ち止まり、眺め、組み合わせられた色彩から語り掛ける作品となっている。



<A棟中庭> 「Vessel」
作家：新實広記（ガラス）
サイズ：Φ 450mm /120kg, Φ 300mm /40kg ガラス球体

光を取り込むガラスの特性を生かし、人と自然が対話する器をめざした作品となっている。



受託事業応募作品



「Cultivation2010」 平戸真児



「雨あがる」 鈴木法明



「季節風」 片岡雅子



「水守」 田中毅



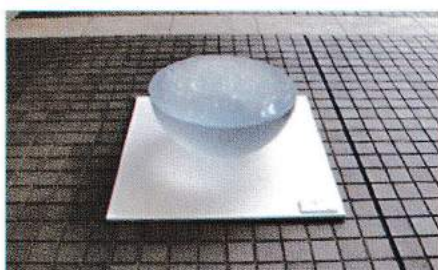
「八雲立つ / 天地を巡るもの」 戸田裕介



「記憶」 川原 昭



「景 No.2」 帆足枝里子



「Vessel 13-5」 新寛広樹

芸術的な焼物文化を歴史に刻む仕事

株式会社 丸 勝
常任顧問兼創作タイル事業部顧問
日本建築美術工芸協会法人会員
常松 欽治



私は、若き頃より創作タイル一筋の人生を送っております。永年勤め上げた窯業メーカーを退職後、現在株式会社丸勝の常任顧問として、東京支社に従事しております。自分の得意とする分野で、世の中に役立つ事をせよ、とのミッションに基づき「創作タイル事業部」を東京支社にて発足いたしました。お施主様や一級建築設計事務所様等のコンセプトに合わせた製作は、試行錯誤しながらも充実した毎日です。熱い情熱と責任の重大さが常に交錯しますが、歴史に残る建築物に関われる喜びは、言うまでもなく感無量であり、大きな達成感が私を疲れから解放してくれます。

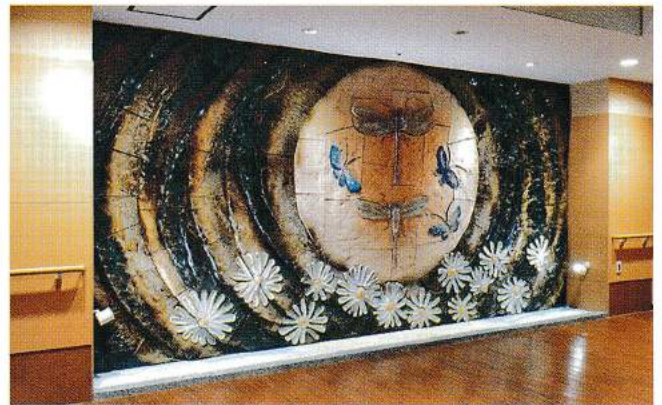
創作タイルとは、焼き物の極みでもあり、カタログには載る事の無い製品です。色、形状、大きさも様々と異なり、主に長期建築物の外装を彩る特注製品です。

今から14年前の事、「某大学キャンパス計画」の創作タイル製作は、私にとって生涯忘れる事が出来ぬほど、素晴らしい機会を与えてくれました。タイルメーカー6社に依る各社自由提案は、類を見ない壮烈な製品コンペでした。900角のパネル計380枚が現場に並び4か月に及ぶ試作品製作後、最終決定品に選ばれた時の感激は忘れられません。監理者から施工後の剥落を問われた際は「人間のする仕事に絶対は不可能です」と答えたために、ひどく叱られた事もありました。最終的には関係職種各位の努力と注意に依り防止、ベビーハンマーで1枚ずつ打診検査を行い合格。10年後も濁音数枚に留まり、現在に至ります。外装タイルを合計で3万8千平米受注、苦難の実績を得た次第です。

昭和38年には、愛知県瀬戸市に於いて、当時の陶芸作家・故加藤唐九郎先生製作に依る焼物壁画が誕生し、建築業界において「陶壁」と命名されました。偉大なる作品は、公共物件や病院等へも多様化されました。「土には個性があり、

土は生きている」との名言を心に刻み、終生の教本として、土に心を通わせ、土の味を知り、土の個性を活かしております。また、各地で多発する地震が多い日本ですが、現代建築基準法にも適合するよう工夫し、安全な落下防止策も講じながら、内外問わず様々な空間を演出する創作タイルの設計をいたしております。

仕事柄、焼き物との縁は実に深く、趣味も陶芸です。愛知県をはじめ、各地で活躍されている陶芸作家の先生方との繋がりが、気がつけば半世紀を超えました。陶芸家や芸術家先生方と集い、高級マンション等のエントランスを彩る斬新なオブジェなども企画。意匠専門の設計デザイナーの先生方に貴重なご意見を仰ぎながら、日々ご提案させていただいております。歴史ある作品を刻むには、全ての焼物も「自然・人・環境」との調和が大切です。今なお原点を学び、未来を育み続ける事が私の仕事であり、使命だと信じて邁進しております。若き世代の方々にも本物を感じて頂き、後世に残る作品提供が出来ますよう、努力致したいと存じます。



エントランスを彩る陶彩板 某病院



某大学のキャンパスを彩る外装創作タイル



エントランスを彩る陶彩板 某ホテル

「空間」としての彫刻

彫刻家
二紀会会員
日本建築美術工芸協会会員

田中ショウ



「オレは日本に帰ったら彫刻家になる！」

1年間心理臨床の専門家である妻と共に留学していたワシントンDCの国立小児病院での研修を終え、帰国する飛行機の中で宣言していた。もう40歳を過ぎていた。

私はそれまで美術の勉強をしたことはなかった。子どもの頃から絵や彫刻は好きだったが、大学でもその後もずっと臨床心理学に携わっていた。しかし留学中にアメリカ、カナダ、ヨーロッパやアジアの美術館を巡って、眠っていた何かが刺激されたのだろう。それ以降、石というもっも原始的な素材のひとつに魅かれ、思いどおりにならない相手と闘い続けている。

彫刻の美を構成する要素は様々だが、私は便宜的に、彫刻を「実在と空間の組み合わせ」という観点から見ることもある。この場合の「実在」というのは素材そのものとともに「現実」や「肉体」を意味し、「空間」は物理的意味での空間であると同時に「思想」や「精神性」といったものに近い。そしてどちらかという、私自身は「空間」のほうに意識が向く傾向があるようだ。最近の〈INTERSTELLAR〉(星間の)という作品は、3.8トンの原石から掘り出したものだが、作品自体は800キロなので、3トン削ったことになる。

「mottainai」という言葉が国際的な共通語になる時代に、本当にもったいないと思うのだが、どうしてもそういうことになってしまう。

実在彫刻の代表といえば、彫刻を独立した芸術として再確立したロダンが浮かぶ。

これに対して近代彫刻の創始者であるブランクーシは、

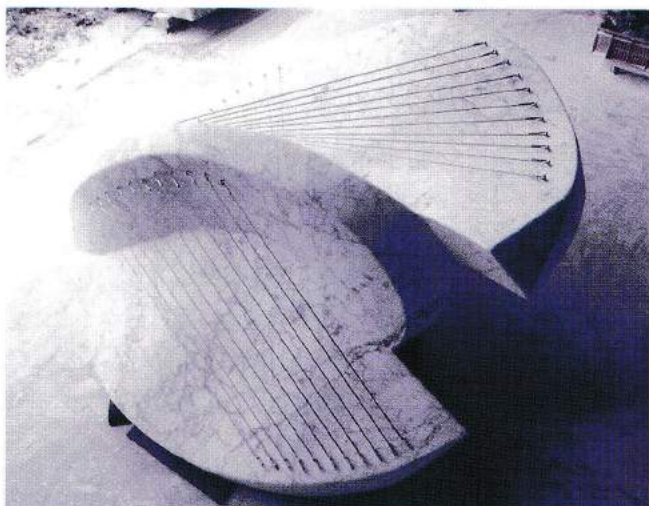
このロダンの彫刻を「血のしたたるピフテキのようだ」と評している。ある意味、このピフテキの部分を徹底的にそぎ落したのがブランクーシの新しい彫刻と言える。それ以降の彫刻はこのブランクーシから出発して、いわゆる近代の「精神性」とも言える「空間性」をとりこんだ彫刻へ発展してきているという印象をもっている。例えば、アルプ→ガボ→ムーア→カルダー→ジャコメティといった流れにそれを見ることが出来る。

こういった流れは私個人の中の制作の推移とも相似している。彫刻のクラシックな勉強として、まず粘土を固めていくことから始めるが、徐々に様々な素材や方法を試しつつ、空間を取り込みながら展開してきたように思う。

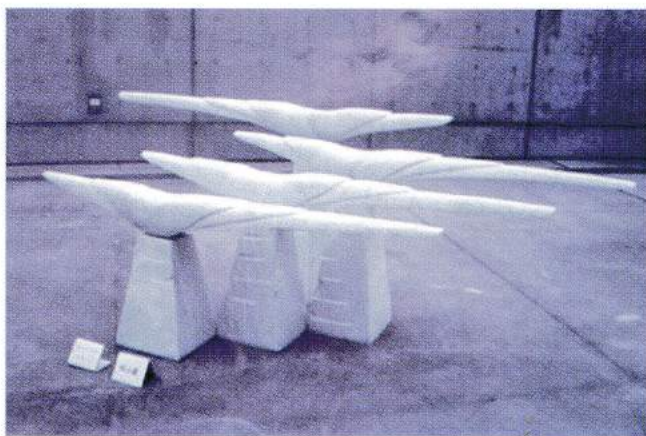
彫刻は量の芸術と言われる。私の目指す彫刻の美は、徹底的に「形」を追及することによって、限りなく「形」から離れていくことかもしれない。つまり意識として形をつくるのではなく、根源、いのちから生まれる量塊の結果としての形に近づくこと。いわば「形から離れることによって形をつくる」ということになるのだろうか。

最後に、彫刻と建築の関係は兄弟のようだと言ってよいだろう。ルネサンス期には優れた彫刻家は建築家であり、すぐれた建築家は彫刻家でもあった。

近世になって両者はそれぞれの独立した道を歩んだが、今、互いに新しい調和を目指す時を迎えているように思う。人の心までも豊かにする空間の創出に向けて、ますます互いの才能を必要としているのではないだろうか。



INTERSTELLAR 2016



砂とロレンスとハルマッタン 2010

日本工芸の復興を目指して

公益財団法人 日本工芸会理事長
一般社団法人 ザ・クリエイション・オブ・ジャパン
代表理事

林田 英樹



日本建築美術工芸協会を創設されたのが芦原義信先生だったことを知って、私が文化庁で働いていた頃に、先生から日本の景観対策の遅れをたびたび指摘されたことを思い出しております。近年になって、ようやく文化的な環境への関心が高まり始めているように感じますが、先生のご意思に沿えるよう、今後の協会の活動が一層発展することを願っております。

十年前に六本木に開館した国立新美術館の初代館長に私が就任した時には、美術館の周辺は、まだ夜の街の印象の強い地域でした。その後、サントリー美術館や21-21 デザインサイトが開館し、道路の整備が進められ、洗練された商店やレストランの開店も続いています。先に開館していた森美術館とも連携した「六本木アート・トライアングル」と「アートナイト」も定着し、今では六本木は上野と肩を並べる文化ゾーンといわれるまでになってきました。文化的な街づくりにとって、美術館の果たす役割が如何に大きいかを示す好例となったと思います。

世界に目を向けると、最近では「美術館の黄金時代」と言われるほど大規模な美術館建設が進められています。経済的に衰退した地域にグッゲンハイム美術館を誘致して観光客の押し寄せる地域に再生したスペインのビルバオの例は特に有名です。フランス、イギリス、韓国、シンガポール、香港、アブダビなどの例が良く話題に上ります。中国が進めている北京の新しい国立の中国美術館建設や年間数百に及ぶ計画的な美術館・博物館建設計画には、目を見張るものがあります。

このような時代の背景には、経済的な発展の結果、人々が求めるものが物の豊かさから心の豊かさへ変化している

ことがあると思います。内閣府が継続して調査しているところでは、日本の場合、昭和50年代半ばから「物の豊かさ」を求める人より「心の豊かさ」を求める人の方が多くなり、最近では1対2の割合になっています。同じような変化が、多くの国で起こっているでしょう。

更に、ビルバオの例に見られるような、文化・芸術が経済活動において新たな需要や付加価値を生み出すことへの期待も高くなっています。日本の場合には、製造業を中心にして経済発展に成功してきましたので、このような期待はまだ強いとはいえませんが、「クールジャパン」政策に注目が集まるようになってきているのは、その傾向の表れといえるでしょう。アニメ、マンガ、ゲームなどの若者文化や和食などへの高い人気に注目して、国内外への文化発信や輸出を進める政策が強化されつつあります。

このような中で、日本建築美術工芸協会の活動分野の一つでもある工芸についてみると、19世紀後半に西欧諸国で巻き起こったジャポニズムの中で、日本文化の魅力的な柱と認められた歴史があり、我が国が世界に誇れる文化のひとつであるにもかかわらず、注目度が低いように感じられて残念でなりません。

このため、私たちは日本の工芸への認識を高め、その復興を図るため、オールジャパンで新たな潮流を生み出そうと、3年余りに一般社団法人「ザ・クリエイション・オブ・ジャパン」を立ち上げました。そして、作品のクオリティをより高め、新しい市場創造をサポートする活動を行ってきました。

また、この活動の一環として、昨年文化庁の補助を受けて、「21世紀鷹峯フォーラム」と名付けて、主要な美術館、博物館、美術系大学等の諸機関が連携し、工芸を「見る」「学ぶ」「考える」、そして「体感する」さまざまなイベントを同時多発的に開催しています。

平成27年度は、「オール京都、工芸の祭典」を実施しました。本年度は、10月22日(土)から1月29日(日)まで、「工芸を体感する100日間」として、東京の女子美術大学美術館が中核となって100以上の機関が参加し、300以上のイベントを開催します。各イベントの情報は、ガイドブックにまとめて参加する美術館、博物館、美術系大学などで無料配布することとしています。また、来年は金沢での開催を目指して、準備を始めています。

工芸の復興を、「誰かにやってもらいたいこと」から、「一緒に取り組むこと」にしていこうではありませんか。



トリッキーなヴィジュアルとオブジェで世界に発信!

デザインファーム代表
日本グラフィックデザイナー協会会員
U.G. サトー



イラストレーションと立体的なオブジェを通じてヴィジュアル・メッセージを世界に発信してきた。

合理的・観念的な見方を避け、藪にらみとも言えるユーモア表現に徹している。このような視座から引き出される私のイメージは一見本質をはぐらかしたかに見える遊びやナンセンスに富んだもの。世界の表層も深層も一挙にとらえるための仕掛けだと嘘ぶいている。モチーフは鳥獣や樹木、身の回りに転がる誰もが知っているようなもの。これらによって触発されたイメージを写真や言葉に頼らずシンプルなイラストで伝えることを私の表現方法としてきた。こうして生まれたビジュアルが見る人の心を挑発し、DNAの記憶を呼びさまし、微量ながらも脳細胞を刺激しながら蓄積されればうれしい。できれば手品師のように鮮やかに、サーカスのようにスリリングに見せることを私は心がけている。たとえ目をそむけるような暗たんたる世界の惨状を訴えるにしても、遊び心もたらずユーモアやウィットが見る人の目を気軽にひきつけ、さらなる関心を起こさせるに違いないと確信しているからです。

とりわけ多くのポスターやアニメーションを表現の手段として使ってきた私の仕事は三次元のオブジェやファンチュアをデザインすることにおいても基本的姿勢に変わりはない。

木を削り金属を曲げてつくる立体表現に於いてはドローイングはメインな手段にはならず、逆に遠近感さえも錯視することによって表現領域が一段と増えると考えているのです。

2016年7月から2ヶ月間、平塚市美術館で行われた「トリック・トリック・はっと!トリック」展に出品した“触まれた箱”や「地球温暖化」のポスターは、こうした発想を土台にして生まれたもの、

「日本列島」と「地球」の2つの箱は、私たちの住みかを生命の入れ物としてとらえ、排出物に汚染され、温暖化によって傷つく触まれた箱として制作。それぞれの箱は周辺がギザギザに触まれた入れ物のようだが、角度を変えて眺めればまだまだ回復可能な箱として眺めることもできないわけではない。これら2つの箱は、制作した当時は福島に近い茨城の海岸に置いて撮影されたものだが、やがてこの海と陸も2016年の大地震の被害をこうむるとは予想だにしていなかった場所でもあった。

こんな経緯を経ながらも、トリッキーで壊れやすい2つの箱は、個展や企画展を通じて世界にアピールされ、モントリオール美術館の永久保存作品にもなっている。

今回、本紙の紙面をお借りして地球の危機を立体と平面の2つの表現でお見せできたことを喜んでいる。

〈略歴〉

U.G. サトー (ゆー・じー・さとー)

世界の四大ポスタービエンナーレ (ブルノ、ワルシャワ、ラハチ、モスクワ) のいずれにも金賞受賞。

著書に U.G. サトー (ggg Books 36)。

「富士山うたごよみ」 俵万智と共著、「あめかな」、「あかあおふたりで」等 (いずれも福音館書店)



ポスター (地球温暖化に警告) 1998



触まれた箱 (日本列島) 1987



触まれた箱 (地球) 1987

第 80 回新制作展を通して

造形作家

日本大学生産工学部 教授
日本建築美術工芸協会会員
調査研究委員会委員

二井 進



新制作展は今回 80 回展を迎えた
創立時の「反アカデミック」な精神のもとに何ものにも
ばられない自由な発想の下、あらゆる表現を追い求めて
きた。

数多くの表現を追い続けた先達から受け継いだものも
多い。熱い議論も数々の場面で戦わされてきた。

今回は 80 年のアルバムの中で様々な場面を見ることが
出来た。オート三輪での搬入・搬出（時期的には台風が来
ているなか搬入したことも度々）、審査風景（丁々発止の場
面も数知れないと聞いています）、展覧会風景、懇親会、上
野の美術館での展示風景。

ここに関係性の大切さを感じる。われわれは先達より表
現することの姿勢について多くを学び、教えられ、吸収し
てきた。過去、彼らがしてきた仕事とこれから我々が伝え
ていく必要性は何かを考えさせてくれる。

展覧会は美術館という抽象空間に在るが、作品達は特別
な存在ではなく、生活の中にあるかたちとして、街角に、
建物に、日常の風景の一部として在ることが大事なことと
思う。

ここでは aaca 会員の方々の作品を会場風景とともに数点
掲載させていただいた。



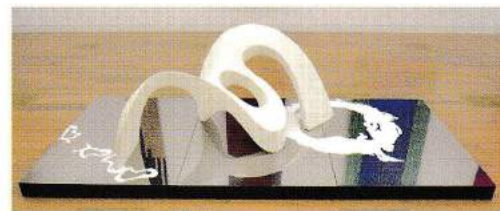
尾埜行男（小野行雄）「数え日時計」



雨山智子「水の祈り」



左：澄川喜一「そののあるかたち 2016 アカマツ」
（澄川氏の写真は図録写真より抜粋）
右：田中遼 「The Thirteenth in the Purity」



二井進 「渦動」



野口真理 「つちの種から」 作者と作品

タイルモザイク展 浮遊する陶片 2016

タイルモザイク作家
日本建築美術工芸協会会員
フォーラム委員会委員
松本 治子

建築素材のタイルとモザイクとの出会い

私の表現活動はタイルモザイクを中心に平面を構成する絵画を制作しています。

タイルとの最初の出会いは大学生のころ、原美術館（品川区北品川）で出会ったジャン＝ピエール・レイノー〈ゼロの空間〉（1981年）の作品でした。建物の内部曲面を含む閉ざされた空間すべてが白いタイル張りの異空間に変貌している驚きと共に、非常に居心地の良さを感じました。

大学卒業後はINAX（現LIXIL）銀座ショールームの勤務となり、新人研修時に受けたモザイク制作研修がタイルモザイクとの出会いとなりました。そしてイタリア・ラヴェンナでのガッラブラキディア廟堂のモザイクの眩しさを目にした時の感動が今も創作の原点となっています。私は10歳のころから油絵を描いていました。その一枚の絵をタイルモザイクで表現して以来、密度のあるボリューム感とクールさを併せ持つタイルの風合いに加え、タイルの断片の隙間に生まれる空間に魅了されています。

タイルモザイクと表現方法

タイルモザイクの表現方法は、「石、ガラス、貝殻、木などの小片（断片）を寄せて作る絵又は模様」、「消したい部

分の区画をぼかして見えなくすること、又はその処理」といった具体性と創造性の二面性があり、この二面性に不思議な魅力を感じています。

私は、その具体性では、モザイクの緻密さから生まれる揺れる水面の日光の反射のような輝きをベースにしています。創造性では、従来のモザイク技法を少し離れて、画面の半分以上は空白な面を作り、流動性を意識して目地を入れずに仕上げ処理しています。同時に、意識の断片が拡散している自己を拾いあげ、整理して、手で感じて視覚化すること、その過程も私のモザイク表現になっています。

モザイクは色、形が異なる一片一片が響きながら揺らぎ合い、面と線を構築していきます。まるで植物を育てるように、時間と寄り添い、対話しながら少しずつ広がっていきます。

松本治子タイルモザイク展「浮遊する陶片」

今回、銀座のART FOR THOUGHT（アートフォーソート）で個展を開催しましたが、私は今回の展示にあたり、制作する前に会場を数回訪れました。ART FOR THOUGHTはお店の名前の通り、アートが身近に感じられ、静寂な空間は時間を忘れて、創造力に栄養を与えてくれる場の空気が流れていました。その空間を通りぬける風のような作品をイメージして制作し、ART FOR THOUGHTの空間の時間と流れも、モザイクの一片となり今回の展示となりました。

今回の展示に際しまして、多くの方のご理解、ご協力で開催させて頂きました事を心から感謝申し上げます。



調査研究委員会だより

「エコロジーとアート」発行に際して

建築家
日本建築美術工芸協会会員 南 三一郎
調査研究委員会委員長

研究テーマ「パブリックプレイスとアート」について

調査研究委員会では、“より美しい都市環境をつくる”という aaca の理念を受けて、“都市環境とパブリックアートのあり方”を研究テーマとしてきました。

阪神淡路大震災と東日本大震災と続いた未曾有の天災や地方の疲弊による都市・コミュニティの崩壊を目のあたりにし、その再生に向けてアートによるコミュニティの活性化を期待するとき、「パブリックアート」の目的性と意義について一層の論議が必要であると思われました。それには「パブリックアート」のおかれる「場」への考察が不可欠であり、そのため今回の報告においては「パブリックプレイス」という「場」の文化性にも注目し、議論の展開を図るものとししました。「パブリックプレイス」は単に公共空間を意味するものでなく、「人の集まり集うところ」というコミュニティの活性化を促す可能性のある場（またはそのような役割を果たしてきた場所）として調査のテーマとしました。

その中で、テーマ別に4つの分科会を立ち上げ、研究を継続しています。成果としては、先ず2013年評価・政策システム分科会より「パブリックプレイスとアート アーティスト選定要項及び選定基準試案」を編集発行しました。

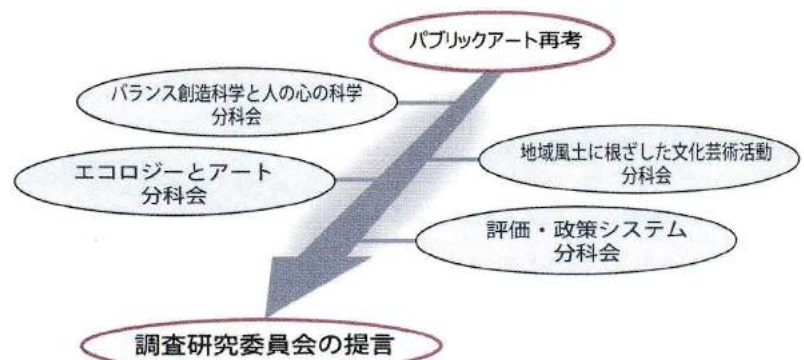
本報告「エコロジーとアート」はそれに続く研究報告です。今日の環境保全や環境共生の思想とアートのかかわり方について言及を試みました。アーティストをめぐる現場をインタビューで探訪するほか、各地のアート活動をレポートしています。よろしくご高覧ください。

また、本委員会の活動にご興味のある方の参加をお待ちしています。ふるって、ご参加ください。



4分科会の研究テーマ

- 1 “バランス創造科学と人の心の科学”分科会
—古代から今日までの歴史遺産を成り立たせた
往時の地域・社会・科学技術への考察
- 2 “エコロジーとアート”分科会
—日本文化の底流になる自然との共生による
伝統造形の検証と未来への展望
- 3 “地域風土に根差した文化芸術活動”分科会
—まちづくりに見られる文化芸術活動、
地域の文化継承に関する調査研究
- 4 “評価・政策システム”分科会
—パブリックアートの社会的な評価軸の構築に
資するプロセスとメソッドに関する研究・考察



アピランス



大建設計
DAIKEN SEKKEI, INC.

本社 〒141-0022 函館アリーナ
東京都品川区東五反田5丁目10番8号
大建設計東京ビル TEL 03-5424-8600(代)

Panasonic

建築に自由を与える。

SmartArchi
Architectural Lighting



パナソニック株式会社 エコソリューションズ社

元旦

屋根に夢と技術をのせて

元旦ビュテ工業株式会社

本社/〒252-0804 神奈川県藤沢市湘南台1-1-21 TEL.0466-45-8771
<http://www.gantan.co.jp>



「予算が限られている」
「今すぐ建てたい」
「一定の期間だけ必要」
KOHRI「システム建築シリーズ」
が解決します。

KOHRI 郡リース株式会社

〒106-0032 東京都港区六本木6丁目11番17号
TEL:03-3470-0291(代)

— 訃 報 — 心からお悔やみ申し上げます。



阪田誠造 氏

元会長 7月21日逝去 1928年生 享年87歳 元坂倉建築研究所代表取締役

日本建築美術工芸協会会員 (1989・11～2008・3)、

会長 (2003～2004) 理事 (1991～1993)

協会会報 No.1 寄稿

「建築家・美術家・工芸家の協力スタディー 東京サレジオ学園」

2002 aaca 景観シンポジウム「港町函館の景観・港と光」パネリスト

作 品 東京都夢の島総合体育館、新宿ワシントンホテル、横浜人形の家、

小田急サザンタワー・サザンテラス、聖イグナチオ教会、

名古屋J Rセントラルタワーズ、他多数

受 賞 日本芸術院賞、吉田五十八賞、日本建築学会作品賞、BCS賞、村野藤吾賞



村井 修 氏

会員 10月23日逝去 1928年生 享年88歳 スタジオ・ムライ代表

日本建築美術工芸協会会員 (1990・6～2016・10)、AACA賞選考委員 (1998～1999、2005～2011)

協会会報 No.63 寄稿

「2012年 日本写真協会賞 功労賞 受賞」

協会会報表紙 (2012) No. 63、64、65号

展覧会 1957年「カメラでとらえた彫刻と空間」

1986-87年「世界の広場と彫刻」

2001-02年「シドニーオペラハウスの光と影」

2016年 村井修半田写真展「めぐり逢ひ」他

受 賞 1983年 第37回毎日出版文化賞特別賞

2010年 日本建築学会文化賞

2014年 第14回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞

広報委員会だより

■会報の編集が変わりました。

会報の編集を一新しました。前号まで広報委員のボランティアにより編集していましたが、編集・制作を外注し読み易く、格調高い会報をお届け出来ました。ご意見感想をお待ちしています。

■会員の皆様からの寄稿・情報をお送りください。

時代の華一輪・会員活動レポート・アピアランス・会員主催個展開催案内・会員出展展覧会開催案内等、発刊のタイミングに合わせ掲載致します。

■委員会活動報告ページの拡充

協会には、常置・特別委員会が15あります。活動報告は会員の皆様に役立つ情報発信元です。報告・予定等掲載致します。会員の個展・出展展覧会等のDMを、会報等と同封して発送致します。事務局にご相談ください。

■ホームページにご参加ください（下記：Url）

協会ホームページは、内外より高い評価を受け、AACA賞を始め、協会主催事業へ参加も頂いております。掲載記事は、シンポジウム・展覧会・講演会など協会主催事業の案内・報告、また「会員活動」のページは、お寄せ頂いた会員個展・出品展覧会のDMを、会員紹介ページは個人・法人会員の活動、法人企業新商品の紹介も掲載しております。会員の皆様の作品写真・ご経歴・PRにご活用ください。掲載料は無料です。TOPページのバナー広告(有料)も募集中です。

震災等による「芸術文化復興預金」への募金のお願い

2016年10月末現在 121,354円

協会では、2011年の東日本大震災以降、震災等により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体へ寄付を行なう事業での預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願い致します。

復興預金口座は下記に記載致しました。

ゆうちょ銀行 〇一九店 当座預金
口座名：AACA 芸術環境復興預金口
口座番号：0338383

編集後記

協会では、会報編集委員会とホームページ委員会を合同し、広報委員会として再スタートいたしました。会報担当委員会は会員有志のみなさんで編成され、記事の収集から編集・発送まで協力して運営されています。委員会に参加をご希望の会員の方はお申し出ください。

会員個展・催し物の広告掲載も可能です。詳しくは、広報委員会・事務局にご相談ください。

事務局だより

■新入会員・会員の異動 2016年7月～2016年10月(敬称略)

2016年9月 個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

《新入会員》

個人 会員	松田静心(洋画家)、神まさこ(陶芸家)		
法人 会員	株岩城	代表取締役 岩城 隆	〒158-0081 世田谷区深沢 8-7-13 TEL.044-862-8898
	株丸勝	代表取締役 福田理佐	〒270-0092 柏市若白毛 1296-3 TEL. 04-7193-0092
	南ウェブ	専務取締役 田中隆志	〒167-0053 杉並区西荻南 2-18-17 TEL. 03-5570-8330
	横浜ビル 建材(株)(再)	代表取締役 前川睦彦	〒231-0011 横浜市中区大田町48 川島ビル TEL. 045-212-0992

《会員の異動》

法人 会員	株久米設計	代表者変更	常務執行役員 安東 直 (前任 児玉耕二)
	株 Lixil	代表者変更	ビル事業部 住設首都圏支店 支店長 犬飼幸博 (前任 野中 敦)
	三協立山 アルミ(株) 三協アルミ社	担当者変更	営業開発部 大菱池成之(正) 依田 康治(副) (前任 二本柳 敏)

《訃報》

〔個人会員〕 松尾敏男(2016年8月4日逝去 90才)
日本画家/元日本芸術院理事/多摩美術大学名誉教授
/2012年文化勲章受章

 2016.11 no.75

発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
発行人 会長 岡本 賢

〒108-0014
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
委員長 飯田郷介
会報担当副委員長 野口真理
委員 石田 真人 齋藤 泉 竹生田 正 田島 一宏
中村 弘子 三上 紀子 山崎 和子 山崎 輝子
山下 治子

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション